

平成19年度

教師海外研修

報告書

【派遣国：ウガンダ】

JICA LIBRARY



1195819 [6]

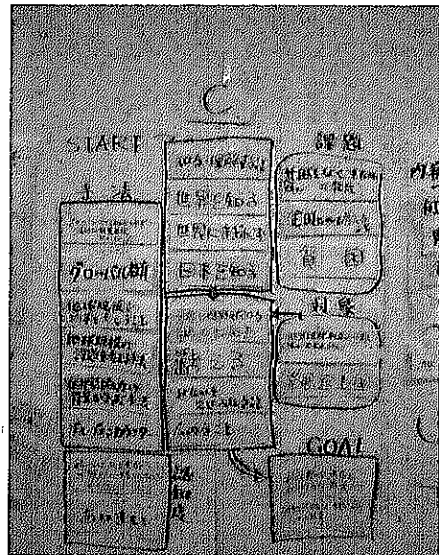
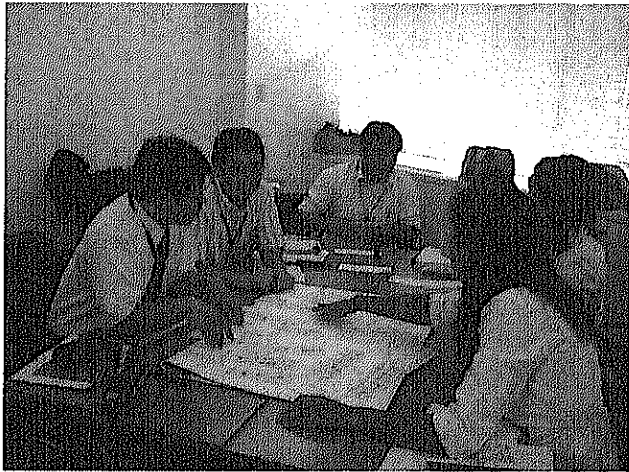


独立行政法人 国際協力機構 東北支部

東北支

J R

国内研修



海外研修後の授業実践プランや授業作りのポイントについて、話し合う研修参加者のみなさん

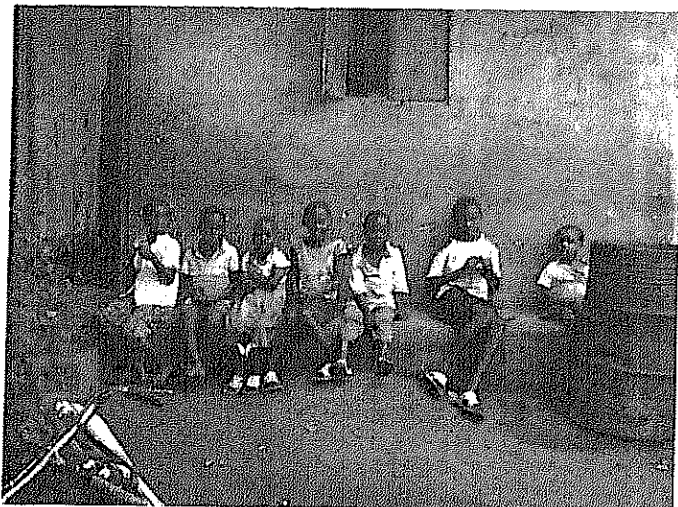
海外研修



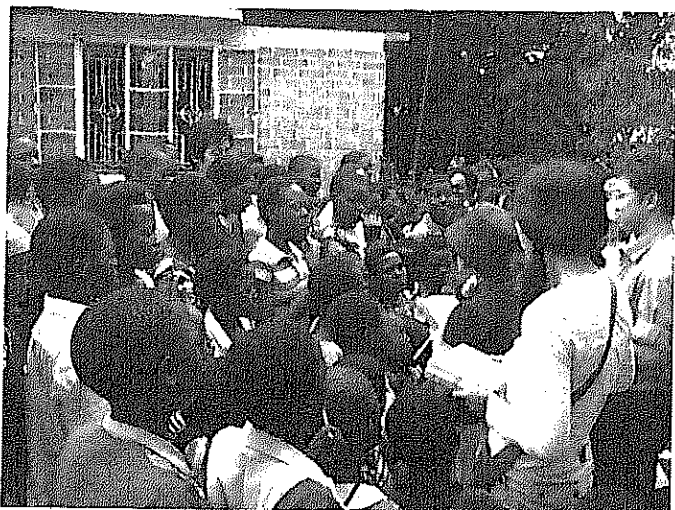
ネリカ米の試験場を訪問する



森林保護区の協力隊員（環境教育）の話をきく



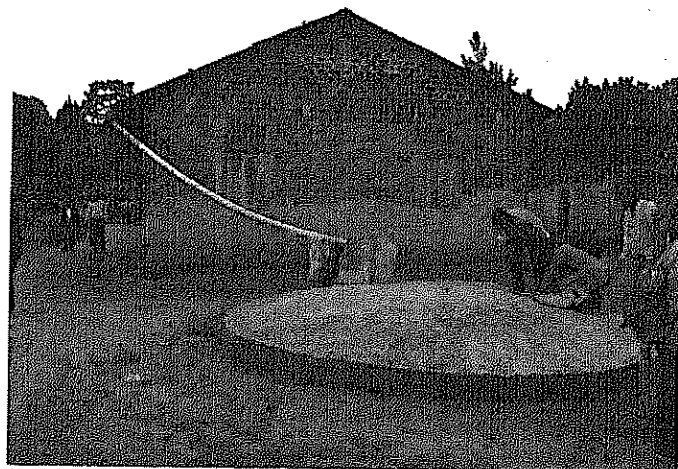
一見穏やかな農村もエイズ孤児が多い



エイズ孤児の学校を訪ねる



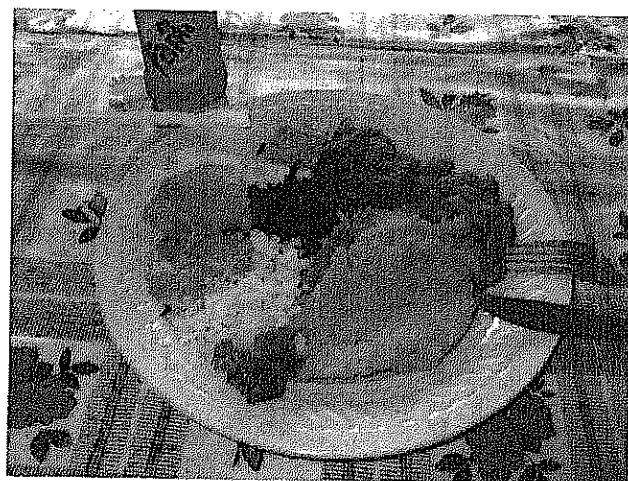
手工芸の指導をする協力隊員



学校内の雨水をためる貯水タンク



水くみをする子供



青バナナが主食のローカルな食事



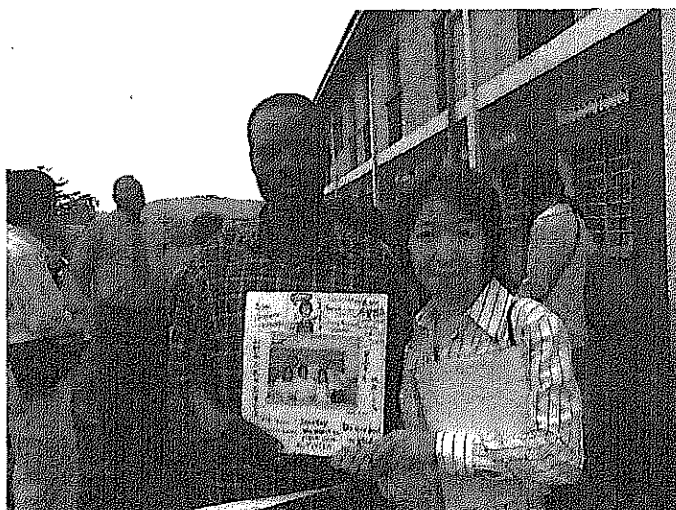
1195819 [6]



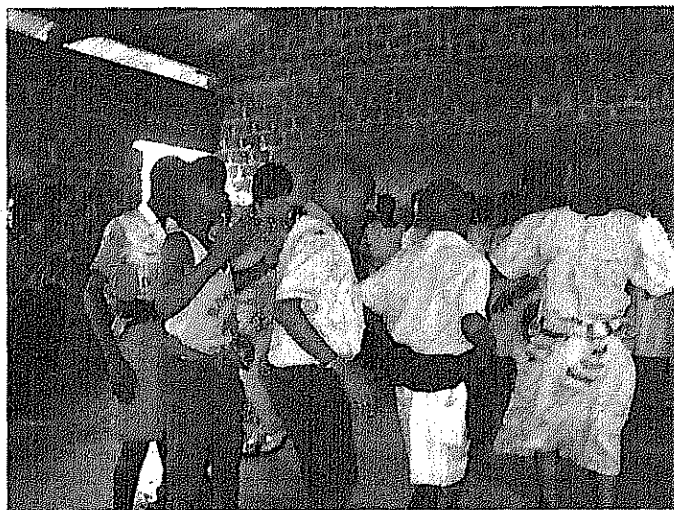
農村の畑 バナナ、コーヒー、いも等が
植えられている



ナイル川の源流



現地高校地理教員と対面！！



踊りを共に踊る

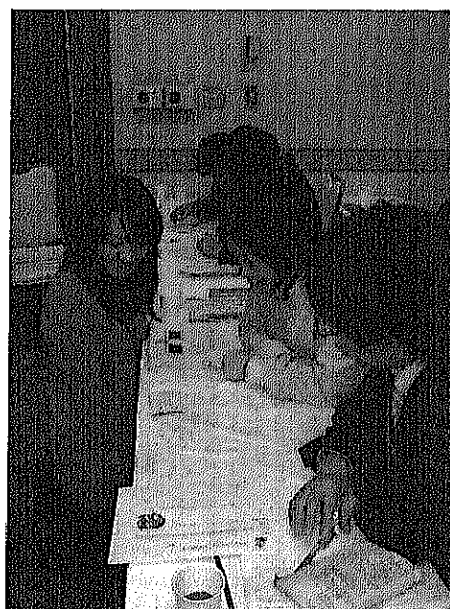
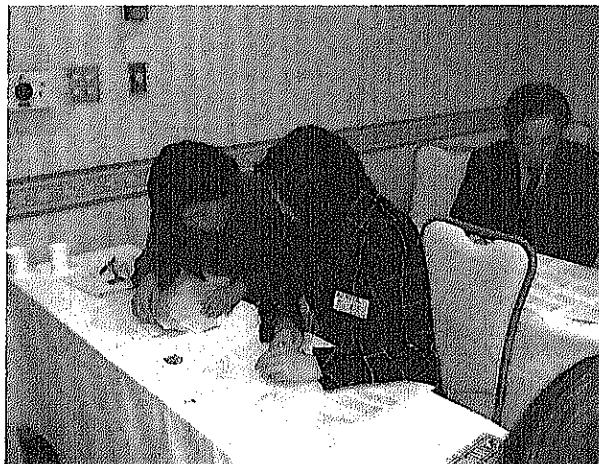
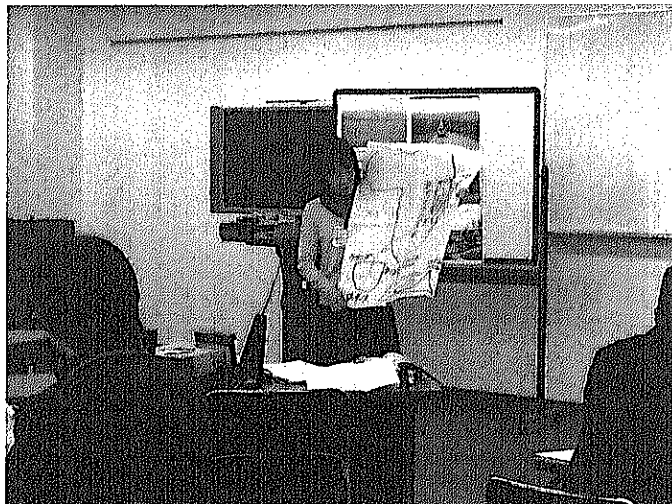


“腰みの”を付け、みんなで踊ったアフリカダンス



青年海外協力隊員（体育）の視察
野球の中から人生を学ぶ

実践報告会



それぞれの実践報告の様子、
教材の共有や、教育現場において国際理解教育を実施するにあたっての問題点の話し合いも行われた。

目次

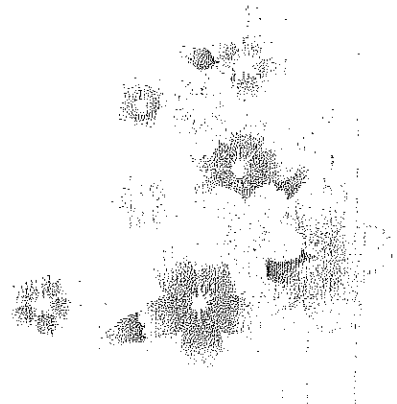
写真集

1、教師海外研修の概要	はじめに/年間スケジュール	1
2、海外研修日程表/コラム		3
3、実践報告書	野村 舞子 教諭 /青森県 五戸町立上市川小学校	13
	・世界の子どもを知ろう	
	竹内 守 教諭 /秋田県 秋田市立港北小学校	23
	・お米から世界をのぞいてみよう	
	鎌田 幸子 教諭 /青森県 むつ市立むつ中学校	32
	・「架け橋」を作る ～小さな半島の小さな学校と 遠くの国の小さな学校が一緒にできること～	
渡部 章朗 教諭 /岩手県 岩手県立大迫高等学校	53	
・ウガンダとバングラデシュの子供たちの現状について		
小笠原 潤 教諭 /岩手県 岩手県立盛岡農業高等学校	58	
・アフリカ ウガンダの自然と人々の生活 ～環境問題を考える～		
松浦 聡至 教諭 /宮城県 宮城県塩釜高等学校	78	
・生徒の目線に立った国際理解 ～受容・発信・実践へ向けての取り組み～		
高子 啓珠 教諭 : 山形県 山形県立長井高等学校	119	
・ウガンダを通して学ぶ中・南部アフリカ		



1、教師海外研修の概要

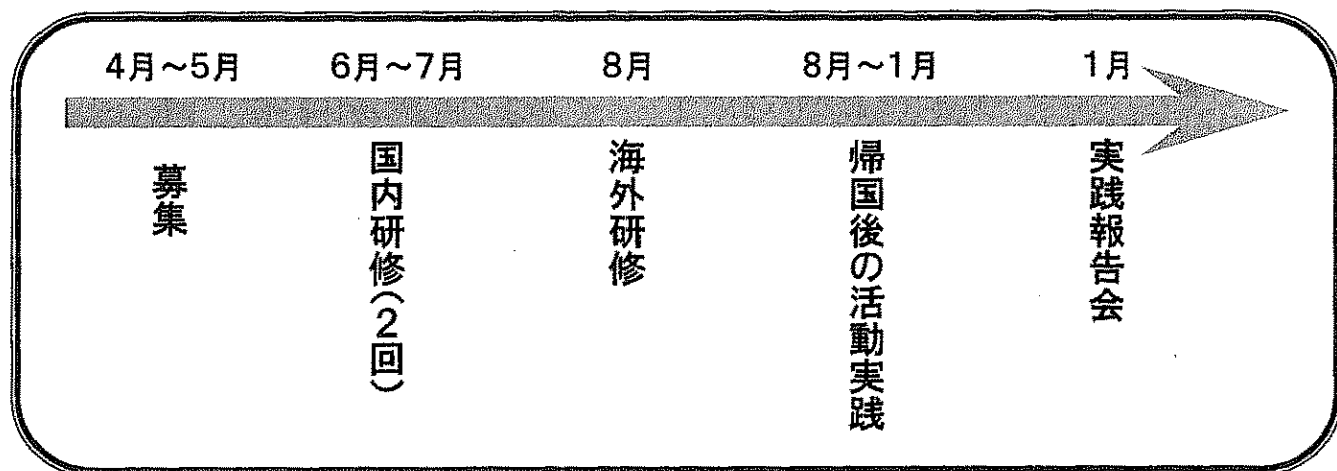
はじめに／年間スケジュール



はじめに

JICA 東北支部では、2007年8月、小学校・中学校・高等学校など、学校教育現場の先生方を対象に、開発途上国における国際協力の現場を視察する海外研修を行いました。本研修は、2度の国内事前研修、海外研修、事後研修を通して、日本との関係や国際協力への理解を深め、その成果を次代を担う児童生徒の教育に役立てていけるよう、学校、地域の現場でご活用頂くことを目的として実施されています。

年間スケジュール



※国内研修はウガンダ派遣・ Bangladesh派遣(JICA 東北・JICA 二本松)合同開催

国内第1次研修 平成19年6月29日(金)～6月30日(土)

- 目的： ①参加者間の情報共有と、渡航上の留意事項や日程概要に係る情報共有
②帰国後の実践に向けての具体的なイメージ把握のための実践事例紹介
③帰国後の継続的な国際理解教育実践に向けた“つながり”の機会の共有

場所：仙台第一生命タワービル11F、15F (JICA 東北) /宮城県仙台市

- 内容： ①JICA 事業概要説明 (開発教育支援事業)
②研修全体の流れ
③派遣国概要、派遣国に共有する課題
④海外研修日程及び訪問先について
⑤渡航手続き、渡航上の諸注意
⑥過年度研修参加者からのアドバイス
⑦過年度参加者の実践事例紹介
⑧実践プラン検討・発表

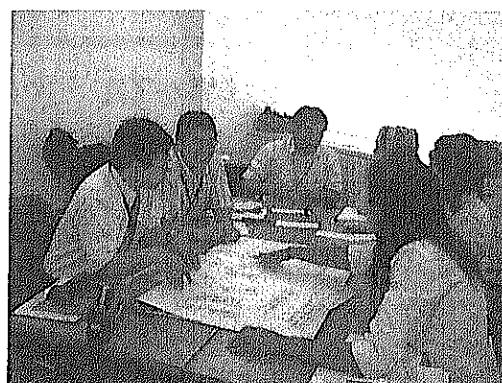


国内第2次研修 平成19年7月27日(金)～7月28日(土)

- 目的： ①渡航直前時点における日程等の最終確認と参加者間の情報共有と打ち合わせ
②帰国後の実践に向けての具体的イメージ把握のための、派遣国における課題の背景をつかんだ実践事例の紹介。
③帰国後の継続的な国際理解教育実践に向けた効果的な手法の紹介

場所：仙台第一生命タワービル11F、15F（JICA 東北）/宮城県仙台市

- 内容： ①開発教育概論～体験を通して～
②バングラデシュ、ウガンダの農村社会とその背景について
③授業づくりのポイント
④授業づくり、発表
⑤ウガンダ派遣チーム、バングラデシュ派遣チーム、それぞれにエール交換



海外研修

平成19年8月1日(水)～8月11日(土)

詳細はコラムご参照

実践報告会

平成19年1月25(金)～1月26日(土)

- 目的： 各教員が取り組んだ国際理解教育/開発教育の実践の児童生徒への効果・実践事例・有効な教材を共有する。

場所：三井アーバンホテル 2F/仙台第一生命タワービル11F、15F（JICA 東北）/宮城県仙台市

- 内容： ①派遣国紹介
②実践報告/質疑応答
③教科・校種別分科会（それぞれの学校現場における具体的実践の可能性）
④県別分科会（東北6県における国際理解教育各県ごとの取り組み）





2、海外研修日程表/コラム

～現場で何を見て、何を感じたのか～



海外研修日程表

研修国：ウガンダ共和国

研修期間：8月1日(水)～8月11日(土)

＜主要データ＞

首都：カンパラ

面積：24.1万平方キロメートル(日本の本州とほぼ同じ)

人口：約2,881.6万人('05)

民族：バガンダ族、ランゴ族、アチョリ族 他

言語：英語(公用語)、ルガンダ語、スワヒリ語

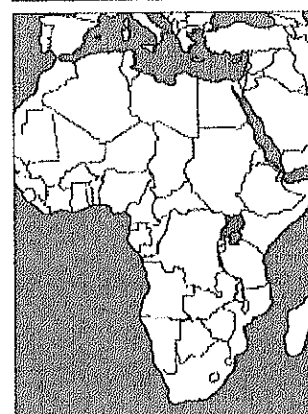
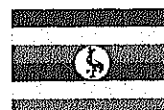
1人あたりGNI：約280米ドル(日本の約140分の1)

成人識字率：66.8%(男76.8%、女57.7%)

妊産婦死亡率：510人/10万人

乳児死亡率：80.2人/1000人

平均寿命：46.8歳(男46歳、女47歳)('00～'05)



＜スケジュール＞

日 順	日 付	内 容
1 日 目	8月1日(水)	関西国際空港→ドバイ空港→Entebbe 空港
2 日 目	8月2日(木)	Entebbe 空港着→ホテル
		JICA ウガンダ事務所と打合せ・懇談
3 日 目	8月3日(金)	ナムロング農業試験研究所訪問
		隊員(小学校教諭)の活動視察
		隊員(野球)の活動視察
4 日 目	8月4日(土)	ナイル河の自然環境視察
		隊員(環境教育)の活動視察
		理数科分科会メンバーと懇談会
5 日 目	8月5日(日)	カンパラ市内視察
6 日 目	8月6日(月)	隊員(小学校教諭)活動視察、及び交流会
		中等理数科教育強化(SESEMAT)プロジェクト視察

7日目	8月7日(火)	隊員(自動車整備)活動視察
		大使館表敬
		あしながウガンダ訪問
		隊員(家政)活動視察
8日目	8月8日(水)	隊員(村落開発普及員、理数科教師)活動視察
		隊員(村落開発普及員)活動視察
		隊員(環境教育)活動視察
9日目	8月9日(木)	隊員(理数科教師)活動視察
		赤道訪問
		資料整理
		在カンパラ JICA 関係者と懇談会
10日目	8月10日(金)	JICA ウガンダ事務所報告
		野生動物教育センター
		Entebbe 空港発(ウガンダ出国)→ドバイ空港
11日目	8月11日(土)	ドバイ空港→関西国際空港着

8月1日(水)

17:40 仙台空港発 19:00 伊丹空港着 21:00 関西空港着 23:15 関西空港発

8月2日(木)

4:45 アラブ首長国連邦・ドバイ着 8:25 ドバイ発 エチオピア・アジスアベバ経由
14:45 ウガンダ・エンテベ空港着

世界の大きなハブ空港の一つであるドバイの空港は、24時間眠らない。外気温は真夜中でも35度。様々な免税店が軒を連ね、多種多様の人々が行き交い、さながら砂漠の一大オアシスの様相を呈していた。このオイルマネーで潤うドバイとは対照的に、ウガンダのエンテベ空港は国際空港と呼ぶには余りにも質素であり、その格差にまず驚かされる。日本製の中古車が多く走行しており、私達の乗ったワゴン車も「〇〇エ務店」のような日本の会社名が消されないまま残っていた。この現象はミャンマー等と同様であり、日本車への揺るぎない信頼と同時に、どういったルートによるものか日本からの中古車輸入の現実を見た。(世界各国に日本の車が溢れているのだろう。)

ウガンダ・エンテベ空港で印象的だったのは、人々の特有の「匂い」である。この匂いは、旅の最後までずっと一貫して毎日何回も経験することになる。

8月3日(金)

8:00 ホテル発
9:00 ナムロング農業試験研究所訪問(専門家:坪井達史氏 ネリカ稲振興)
13:30 ビクトリア小学校訪問(隊員:河地洋明氏 小学校教諭 社会的弱者支援プログラム)
17:00 セントノア中高等学校訪問(隊員:小田島裕一氏 野球 青少年育成支援)

①ネリカ米について…陸稲で、どこでも育ち、穂狩りが容易で生育日数も短い。

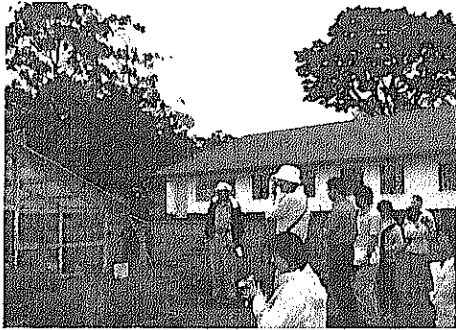
何千通りもの交配実験を繰り返した結果、たった3粒のネリカ米が実ったという坪井専門家のお話は感動的だった。これが飢餓に喘ぐアフリカの人々を救う希望の糧となる可能性が高く、ひいては世界の食糧事情を根底から変えることになるかもしれない壮大なプロジェクトであると知った。

②ビクトリア小学校…2003年設立。400人の学童孤児。うち約8割はエイズ孤児。教員13人。

不衛生、栄養不良、学習用具の不足、と劣悪な生活環境の中で懸命に生きようとする子供達とそれを支援するマザーテレサのような校長、そしてJICA隊員の河地氏の奮闘ぶりに感涙した。このような極限状況においてさえ、子供達の笑顔が屈託なく美しいのは何故なのか、彼らはどんな大人へと成長していくのか、日本の恵まれた子供達はいったい何を失ってしまったのか…等、様々な思いが頭をよぎり、混乱する強烈な体験だった。

③セント・ノア中高等学校…小田島隊員による日本式の厳しい野球指導を通じての人格教育。野球部員30名。隊員の小田島氏が生徒に「ジェントルマン」と声がけすることが印象的だった。冬には駒大苫小牧高校との

親善試合が予定されているとのこと。教員を退職して協力隊参加をした小田島氏の意気込みは敬服に値する。当該高校教員との懇談会の席上、「日本とウガンダは同じ頃に戦争を経験し、その後ウガンダ人は日本人と同じように一生懸命働いてきたのに、何故日本はあれほど豊かになり、我々ウガンダ人はいまだに貧しいのか。」という質問が出され、答えに窮してしまった。



ネリカミの試験場を訪問する

8月4日(土)

9:00 ホテル発

AM ナイル河周辺の自然環境観察(ナイル河源流及びブジャガリ滝)

13:00 マビラ森林保護区視察(隊員:熊本舞子氏 環境教育 環境調和型社会促進)

19:00 理数科分科会メンバーとの懇談会

①ナイル河源流

河面にボコボコと水が湧き出していた。スーダン、エジプトを通り地中海へ注ぐ世界最長のナイル河の源流は意外にもあっけない水の噴出であったが、同時に神秘的な印象を受けた。

②マビラ森林保護区・・・熱帯雨林の森林を利用した、エコツーリズム活動・環境保全教育

大きく3種類の遊歩道(1.7km~8km)があり、熊本隊員がカウンターパートと共に、野鳥や森林など生態系に留意しながら保護している。エコツアーで観光客を集めたいとのこと。「絞め殺しの木」など木にも激しい闘いがあるという事を知った。

③理数科隊員との懇談会

ウガンダ国内の学校で理数科教師として指導に当たる7名の隊員から現状を聞いた。一人は、2回マラリアに罹ったとのこと。間もなく任期を終えようとしている隊員ほど疲労の色が濃く、この地で生活することの厳しさが想像以上であることを知らされた。電気がないならまだしも、水がないというのは辛いとのことだった。



森林保護区の協力隊員(環境教育)の話聞き

8月5日(日)

9:00 ホテル発 オウノマーケット視察

12:00 ショッピングモール(ガーデンシティ)視察

①オウノマーケット・・・カンパラ最大の市場・毎日35万人が訪れる。

日用品から食材まで全てが揃う巨大市場。ナイルパーチの解体など珍しい場面を見ることができた。バナナやマトケ用バナナ、ポシヨ用トウモロコシ、香辛料、パキスタンやベトナム産の米、ティラピア、キャッサバ、美容院、歯医者まであった。ネリカ米はないかと探したが、地元民にとっては「RICE」という認識でしかなく、それがまさかアフリカを救うかもしれない陸稲であるという事実は一般に流布していないらしい。紅茶は片手拳くらいの分量で300シリング(24円)だった。(購入して日本の自宅でチャイにして飲んでみたが、美味しかった。) * 1UGX(ウガンダシリング)=0.08円

世界中において市場訪問はその国の庶民の事情を理解するのに一番手っ取り早い手段であり、価格相場も把握でき、何と云っても旅の醍醐味である人々との交流ができるというメリットがある。

なお、写真撮影は危険との話があったが、人相や雰囲気を見て判断し、50枚程の撮影に成功した。どの場合にも言えることだが、撮影には大胆且つ慎重な姿勢が必要で、被写体との何かしらの心理的ラポートを取ることが望まれるのではないか。(例えば、日本のキャンディや煙草を1本あげるなどでもよい。)私は「アイコンタクト」でまず可能性を探り、「低姿勢」に徹し、「ユーモア」を忘れないこと、興味本位ではなく「あくまでも向学のため」であることを肝に銘じていた。いずれにせよ、日本製の高額なデジカメやビデオを不用意にちらつかせないことが大事。また、この際私達は質素な服装をし、(私のデジカメ以外は)誰も貴重品を持たなかった。

②ショッピングモール(ガーデンシティ)・・・南アフリカ資本の総合デパート

本屋、洋服、日用品、スーパー、レストランなどテナントが沢山入っている南アフリカ資本の総合デパート。価格は日本並みで割高感がある。客層も身なりが良く、一瞬ここは日本だろうか、と錯覚してしまう。アフリカ=貧困のイメージが覆され、やはりウガンダも日本同様、都市と地方の地域間格差が大きいと知った。ウガンダ国内は電気使用率が僅か6%という現実から考えると、資本は主にカンパラ、ジンジャ、エンテベなど一部の都市に集中しているのだろう。しかもこのデパートのように外国資本だったりもするのだろう。

8月6日(月)

8:00 ホテル発

9:30 キジト・バンダ小学校訪問(隊員:山浦遼氏 中等理数科教育強化)

15:30 カンパラ・コロロ高等学校にて中等理数科教育強化(SESEMAT)プロジェクト視察
(専門家:岡本剛氏)

①キジト・バンダ小学校・・・1986年設立。ミッション系学校。児童400人、教員10人。

山奥の悪路を車で走ること1時間半、電気のない村の小学校に到着。仙台市(宮城教育大学)出身の山浦隊員が基礎指導として楽しい実験方法や授業内容の工夫をしつつ、児童への直接指導及び同僚教師に助言をしている。児童は一様に明るく、人なつっこく、のどかな風景と相まって山村の純朴な子供達に心洗われる思いがした。そこで当該校の教員達と輪になって意見交換を行った。「このように学校で生徒に教

育することに誇りをお持ちですか。」という質問に対し、一応YESという答えが返ってきたが、彼らの諦めとも希望ともとれる表情からは、どうにもならないこの国の事情・教育予算の低迷・生活に窮する給料、など一言では言い尽くせない問題が山積しており、それでも一縷の希望を持って精一杯努力しているのだ、と言いたげな気持ちが伺えた。座談会終了後、皆でランチとなり、彼らにとっては来客をもてなす御馳走と言えるローカルフードを提供された。ポシヨとティラピアのスープだった。調整員の小畑氏が手で食べ始めると、我々は全員手で食べ出した。それもまた極めて自然な行為であると思われた。1日だけのお客さんであれ、「郷に入りては」なのだから。

ところで「手で食べるコツ」だが、人差し指・中指・薬指の3本指で食べ物をすくい、親指で口の中に送り込む、のだそうだ。

②中等理数科教育強化(SESEMAT)プロジェクト

現職教員研修を通して、教員の指導力向上により、中等理数科教育の質を高め、もって生徒の理数科教育能力を高める事を目的としている。モデル県の指導的教員が研修を受けた後、各学校に持ち帰って地方研修を行う。岡本専門家がチーフアドバイザーとして指導に当たっている。

岡本氏のプレゼンから興味深い事実が幾つか浮かび上がってくる。

- 1) 実験器具の不足→実際はあっても使われていない
- 2) チョーク&トーク→ただ教師が板書して生徒が写すのみ。考えさせる授業を展開していない。体罰も横行している。PDSAを踏まえた授業作りを教師に指導している。
- 3) 国民性として時間厳守の感覚は希薄である。→ 優先順位の価値観の相違
- 4) 教師の意識改革→最も大切なのは、「生徒の話を聴くこと」。ウガンダ教師に一番欠如している。
- 5) 数年前一時帰国してみて、日本は何と病んだ社会なのかと思った。これからはウガンダを救うよりも日本を救う道を模索したいと考えている。
- 6) ウガンダは今、国作りを行っている最中、と捉えれば良い。種々の問題を乗り越えようとしている過渡期にあるのだ、と理解している。学力における学校間格差は日本以上に大きい。

8月7日(火)

8:30 ホテル発

9:00 国家警察庁・車両管理部視察(隊員:唐橋徳幸氏 自動車整備 職業訓練教育強化)

10:00 日本大使館表敬訪問(大使:菊地氏)

14:00 あしながウガンダ訪問(NGO:エイズ孤児育成支援)

15:30 NGO地域女性トレーニング事務所視察(隊員:市嶋千代子氏 家政 社会的弱者支援プログラム)

① 国家警察庁・車両管理部

唐橋氏は2代目隊員として、警察庁唯一の警察車両修理工場で実技指導と共に定期的な整備点検・維持管理システム構築を図っている。デモ鎮圧用の鋼鉄の鎧のような車両や要人護衛用のオートバイなどが並んでいた。整備士を目指す生徒達にとっても、教員達にとっても、隊員は絶大な信頼を受けており、彼なしには工場運営は成り立たないとまで言われていた。エンジンのオーバーホールから細部の修理まで丁寧な指導が行われていた。日本であればとっくにスクラップになっているであろう車が大事に修理され、再生している。この点も日本との比較ができる点と言えよう。

②日本大使館

インドに40年勤めた菊地大使との座談会において、国際舞台で活躍してきた大使のウガンダ観、日本観を伺うことができた。

質問1 「現在、日本ではワーキングプアやネット難民、格差社会、派遣社員、などが社会問題化していますが、この原因は何であり、どうすれば解決できるとお考えですか？」

大使 「一番の原因は社会構造が欧米化したことにある。終身雇用制度の崩壊など。日本人らしさは聖徳太子の和の観念であり、助け合いの精神を取り戻す必要がある。日本人は何故戦後成功したのか、それを考えれば自ずと答えが出てくる。」

質問2 「愛国心についてどうお考えですか？」

大使 「愛国心がなくてどうするのか。自分のことだけ、仲間だけ、家族だけ、地域だけ良ければそれでいいのか。そんな筈はない。かつてのインドがそうだった。あの他民族国家のインドでは、映画の後必ず国家を流すようになった。ただし日本では、戦時中の愛国心ではなく与謝野晶子の言ったような愛国心が望ましい。そうであれば堂々と国旗も掲げてよい。」

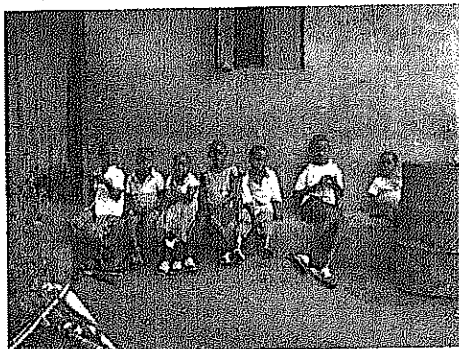
③あしながウガンダレインボーハウス…エイズ孤児支援。日本の「あしなが育英会」が2003年12月に開設。

海外NGOやボランティアによる支援のもと、エイズ孤児達のメンタル面のケアを重視し、グループカウンセリングと学習知識の伝達を中心としたプログラムを展開している。ウガンダは世界で最初にエイズの爆発的流行があった国で、エイズ孤児の数も世界一、約200万人。国の積極的な施策(ABC政策: Abstein 禁欲、Be faithful 忠実、Condom コンドーム)でエイズ感染率は低下している。

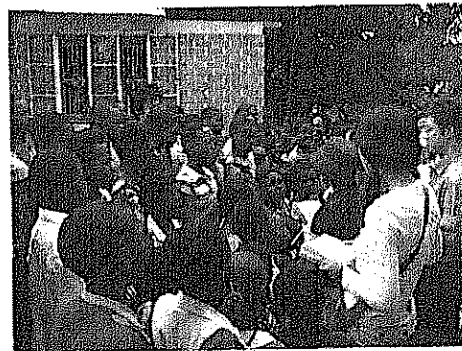
しかし未だに、学校や家庭内においても感染者に対する偏見・差別はひどく、特に田舎ほどひどい。魔女の存在や迷信・崇りなどが信じられている所もある。正確な知識普及に努力しているが道は険しい。

④地域女性トレーニング事務所…夫がエイズで死亡し、取り残された女性のために、2000年設立。

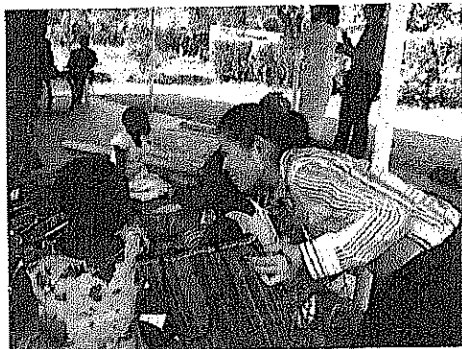
ワイン・クラフト・菓子・養鶏等や保健衛生を指導し、所得・生活向上を目的にしている。市嶋隊員はクラフト製作等の指導を熱心に行っていた。



一見穏やかな農村もエイズ孤児が多い



エイズ孤児の学校を訪ねる



手工芸の指導をする協力隊員

8月8日(水)

8:00 ホテル発

- AM ムピジ県にて隊員活動視察
- ①増井千華氏(村落開発普及員 収穫後処理・流通市場改善)
 - ②吉永博巳氏(村落開発普及員 収穫後処理・流通市場改善)
 - ③鈴木望与氏(理数科教師 中等理数科教育強化)

12:00 ムピジ市役所訪問 市長と対話

14:00 NGOブワマ地域開発団体視察(隊員:松井忠徳氏 村落開発普及員 社会的弱者支援プログラム)

16:30 ムパンガ森林保護区視察(隊員:小林直子氏 環境教育 環境調和型社会促進)

- ①増井千華氏…AICD(アフリカ人造り拠点)プログラムと連携して、農業改良・生活改善を実践している。ネリカ米の普及や、近隣の小学校を対象に「協調意識」の醸成を促すため組体操の指導などを実施。
- ②吉永博巳氏…ムピジ市内の農産物生産者の収益増に寄与するために、学校や女性団体を巡回指導しながら、農業や食品加工への助言・指導をおこなっている。
- ③鈴木望与氏…(私立)ワグンブリッジ中等学校で化学と生物を担当。市長が1992年に設立。生徒130人、教師13人。
- ④ムピジ市長との対話…内戦で多くの人々が死に、またエイズで市や村が深刻な打撃を受け、何とかしなければならぬと考え、学校を作った。真剣に市の事を考えている市長であった。
- ⑤松井忠徳氏…社会的弱者の生活向上を目指し、地域に対し、クラフト製作やネリカ米普及を実施。地域開発のために助言を与えると同時に、小学校で英語、中学校で開発教育の指導もしている。
- ⑥小林直子氏…国内の森林保護区の運営、森林保護活動業務を統括している。エコツーリズム活動・環境保全教育の実践と運営の助言をしている。

*この日は、小林隊員の管轄するバンガローで宿泊した。電気がない状態で薪を燃やし、皆で腰ミノを着けて民族楽器の楽団に合わせて踊り、森に分け入り、静寂からどんな音が聞こえてくるかを体験した。マピラ森林保護区でも同様であったが、エコツアーで観光客を呼び込むのはなかなか難しく、良い方法を模索しているとのことであった。ウガンダ自体が観光立国ではないだけに、集客は一朝一夕にできないだろう。がしかし、この地で懸命に頑張っている隊員達を目の当たりにする時、宣伝活動や集客のノウハウを私も自分なりに考えてみなくてはいけないな、と思った。

8月9日(木)

9:00 ホテル発

10:00 ブクルラ中等学校訪問(隊員:松村理沙氏 理数科教師 中等理数科教育強化)

12:00 赤道訪問、水の渦実験

PM 資料整理

19:00 在カンパラJICA関係者と懇談会

- ①ブクルラ中等学校…生徒1～6年生300名、教員35名。

これまで訪れた学校の中で最も恵まれた学校という印象を受けた。生徒達と芝生で談笑し、将来の夢について質問すると、「医者」「裁判官」「政治家」という答えが多かった。理由を尋ねると、裁判の不正や政治の汚職をなくしたい、病気を治したい、などはっきり答えた。

② 赤道・・・赤道ラインの左右それぞれで水の渦が時計回りか逆回りかの実験を行うと、やはり左右で逆になり、さらに赤道ライン上では渦は全く生じなかった。

③ 在カンパラJICA関係者との懇談会・・・研修中同行者としてお世話になった調整員や州崎所長らと懇談。

これまでお世話になった調整員の方々や国際協力現場の第一線で活躍してきた所長の言葉は深いものがあり、指導・助言をいただき、我々の研修を振り返る良い機会であった。所長の助言を幾つか挙げる。

- 1) この教師海外研修はやらないよりはやった方が絶対に良いが、たった2週間でウガンダの事が分かったと考えてはいけなし、分かる筈はない。また、仮にウガンダに数年居たとしても、アフリカ全土の事が分かる筈もない。
- 2) 帰国して日本の学校で開発教育を広めていただきたい。現場の理解を得るのは難しいであろうが、めげずに頑張ってください。
- 3) 「幸せ」の定義は貧困に喘ぐ人々にとってはまず「お金」(経済)と思われがちであるが、ウガンダにも豊かな点が多数あり、それを日本人が「幸せ」の欠かせない要素として気付いて欲しい。
- 4) ウガンダでも言えることだが、結局は国際協力は、物をあげるのではなく、長期的に人々の自助努力を支援していくことが肝要である。

*今回我々ウガンダチームは、エイズ孤児の学校にノート400冊を寄贈した。この事の是非については上記4)に相反してしまうのかもしれないが、短期滞在である我々にとって可能であったベストの手段であり、全員の総意に基づく判断であり、我々なりに努力したことであった。

8月10日(金)

8:30 ホテル発

9:00 JICAウガンダ事務所訪問

11:30 野生動物教育センター視察

14:00 エンテベ空港着

16:15 ウガンダ出国

① JICAウガンダ事務所訪問

多数の職員が真剣にデスクに向かっていたが、同時にウガンダ国内には約60名の隊員が現場で必死に活動を行っており、壁に貼られた地図にはそれら隊員の顔写真が派遣地に記されていた。これを見た時、我々が視察したのはほんの一部の隊員に過ぎないのだな、と思った。

②野生動物教育センター

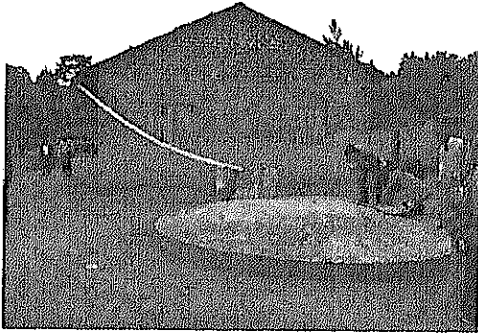
ウガンダ国旗に描かれているカンムリヅルや、アカオザル、オラウータン、などの動物と出会い、アフリカらしさの一端を垣間見た。

8月11日(土)

0:45 ドバイ空港着 2:35 ドバイ発 アジスアベバ経由 17:20 関西空港着

8月12日(日)

12:50 伊丹空港発 14:00 仙台空港着



学校内の雨水をためる貯水タンク



水くみをする子供



農村の畑 パナナ、コーヒー、いも等が
植えられている



青バナナが主食のローカルな食事



ナイル川の源流



3、実践報告書

～帰国後の授業実践～

タイトル (テーマ) 世界の子どもを知ろう
 氏名 野村舞子 (五戸町立上市川小学校)
 実践教科 総合的な学習 時間数 11 時間
 対象生徒・学年 5 学年 対象人数 18 人

(1) カリキュラム案

①実践の目的

- ・ 世界には先進国と開発途上国があるということを知らせる。
- ・ 世界中に起きているさまざまな問題を知り、自分なりに考えたり、振り返ったりする機会を持たせる。
- ・ 先進国と比べ、途上国の人々の困難な生活を予想させるとともに、明るく力強く生きていこうとする姿勢にも目を向けさせる。

②授業の構成案

時限・テーマ・ねらい	方法・内容	使用教材
1 時限目 テーマ：少年兵を知る ねらい：世界中のいろいろな児童、特に少年兵の実態を知る。	(1) いろいろな境遇の子どもの立場を知らせる。 (2) 感想やもっと知りたいことをまとめる。	・ 少年兵の写真 ・ 感想用紙
2 時限目 テーマ：学校へ行けないということ ねらい：読み書きができない児童の背景について知る。	(1) 学校へいけない児童の世界地図を見て、気づいたことを話し合う。 (2) 読み書きができないとどうなるのか自分なりに考えてみる。 (3) 世界中のみんなが学校へ行けるための方法を考えてみる。	・ 「学校へ行けない児童」の世界地図 ・ 感想用紙
3 時限目 テーマ：5歳まで生きられないということ ねらい：衛生上、家庭的な理由で生きられない実態について知る。	(1) 5歳まで生きられない児童の世界地図を見て、気づいたことを話し合う。 (2) その理由、衛生的なことや家庭環境、生活環境について知らせる。 (3) 寿命が先進国レベルまで上がるまでにどうすればよいか考えてみる。	・ 「5歳まで生きられない児童」の世界地図 ・ 感想用紙
4 時限目 テーマ：栄養が足りないということ ねらい：前時と関連して、さらに深める	(1) ハンガーマップを見て気づいたことを話し合う。 (2) 解決策を考えてみる。	・ ハンガーマップ (栄養状態を表す) ・ 感想用紙
5 時限目 テーマ：アメリカのハロウィンについて知る。	(1) 三沢米軍基地のハロウィンパーティーについて紹介する。 (2) アメリカの代表的な食べ物「ピッツァ」と「パ	・ 感想用紙 ・ 写真 ・ お菓子など

ねらい：先進国のイベントに触れる。	ンブキンクッキー」やおかしなどを試食してみる。	
6時限目 テーマ：台湾の生活について知る。（GT シェリさん） ねらい：アジアの子どもたちについて知る。	(1) 台湾の小学校や子ども達の生活について知る。 (2) 地図やキーホルダーや絵葉書で深める。 (3) 葉書作りをする。	・ 台湾の地図 ・ 絵葉書など
7・8・9時限目 テーマ：途上国の子どもたちについて、さらに知りたいことを追究する。 ねらい：ジャンル別にグループを構成し、その内容を調べる。	(1) テーマ別に、本やインターネットで調べる。 (2) 説明のための原稿をまとめる。 (3) 掲示用の模造紙に写真や調べたことや感じたことをまとめる。	・ 模造紙 ・ 本、資料 ・ ウガンダでの写真
10時限目 <川内地区小中連携授業> テーマ：調べたことを発表する。 ねらい：調べたことをもとに、自分たちの意見も伝える。	(1) ウガンダについて簡単なクイズに答える。 (2) グループごとに調べたことを発表する。 (3) 「ウガンダの子ども 日本の子ども」のカードを理由を付けて分けてみる。 (4) 感想を書く。	・ ウガンダでの写真 ・ カード 「ウガンダの子ども 日本の子ども」 ・ 感想用紙
11時限目 テーマ：「幸せとは何か」について考える。	(1) 幸せランキングで、グループごとに話し合ってみる。 (2) 他のグループの意見を聞き、比べてみる。 (3) 感想を書く。	・ ランキングのカード ・ 感想用紙

(2) 授業の詳細 主な子ども達の反応を中心に掲載しておきます。

1 少年兵について知ろう

◎ 少年兵の写真を見て、児童の感想から

- ・ 「同じ人間なのに、同じ子どもなのに、同じ生きようとしている人間なのに、なぜ殺されなければならないのか」と不思議に思いました。今、日本では自殺するという命を無駄にする子どもがいますが、捨てる命があれば、できることなら分けてあげたいと思いました。悲しくて悲しくてかわいそうになりました。できることなら助けてあげたいと思いました。
- ・ 連れ去られるなんて思いもしませんでした。もしウガンダに生まれていたら、たいへんなことになっていたと思う。本当にかわいそう。でも、怖い。
- ・ 少年から銃をいくらでも早くおろしてあげたいです。この少年兵に家族がいるなら、いつかその家族と幸せに暮らしていけることを願っています。
- ・ こんなに早くから銃を持って人を殺すなんて怖いなあと思いました。でも、子どもたちは悪くないと思います。こういう国は、まず大人がしっかりしなければならぬのに、大人が子どもに「殺せ」などと言っては、子どもたちがかわいそうです。
- ・ 自分とは全く違う人。国と国が争って、何になるのか分からない。子どもが人を殺したって嫌なだけ。無駄に悲しいことをしたって、余計悲しくなるだけだと思った。

<課題>写真だけではなく、ビデオで映像を流すなどの工夫があればよかった。もう少し詳しく背景などを伝えたかったが、児童のショックを考えると加減が難しかった。

2 学校へ行けないということ（読み書きができないと）

- ◎ 文字が読めないとうなるか。
 - ・ 今どういう事件がおきているのかも分からない。
 - ・ 買い物ができない。
 - ・ 詐欺に遭う。
 - ・ 子育ても大変。
 - ・ 火事の際に、避難経路が分からない。
 - ・ 事件や災害に巻き込まれる。
 - ・ 仕事に就けない。
 - ・ 世界のニュース、世の中の情報などが分からない。
 - ・ 文字が読めないと、まわりのものも絵で表さないといけないので、大変。
 - ・ 病気にかかりやすい。
 - ・ 手紙を書きたくても書けない。
 - ・ 危ない目に遭ったり、死にかかわったりする。
 - ・ 迷子になる。

- ◎ すべての子どもたちが、学校へ行けるために
 - ・ 募金をみんなに平等に分けてもらう。
 - ・ 途上国の学校をボランティアにする。
 - ・ 世界の法律を作る。「男女の差別は禁止する」「中学校までは義務教育にする」
 - ・ 先進国の人が途上国に行って、国を豊かにし、誰でも学校へ行けるように国自体を変える。
 - ・ 国の偉い人に頼んで、女の人でも学校へ行けるようにする。
 - ・ 先進国の人たちが行って学校などを建て、先生になって教える。
 - ・ 授業料や給食費を払わなくてもいいようにする。
 - ・ 徐々に解決すればいいと思う。
 - ・ 日本の病院の先生など、ハイレベルな先生たちが行って、病気を治す。
 - ・ 税金を増やす。
 - ・ 募金する。
 - ・ 病気を発生させないように、薬や予防接種をする。
 - ・ 国の偉い人が許可を認めるまで、しつこくお願いする。
 - ・ 保育士がいれば、子どもがおもりをしなくていいから、みんなが学校へ行ける。
 - ・ 国際会議を行い、アフリカ州の偉い人に頼んで、みんな平等にするように頼む。
 - ・ 女だから・・・という考えをする偉い人はやめさせる。
 - ・ 施設を作る。

<課題>日本の子どもたちにとって、「学校へ行く」「保護者がいる」「文房具がある」などが余りにあたりまえすぎて、身近な問題としてとらえることが少し難しかった。

7 途上国の子どもたちについて、さらに知りたいことを追究する。

<調べたこと～児童の発表原稿から～>

①「衣」について

- ・ スカートを破けていたり、サンダルを履いていたり、はだしの人もいました。
- ・ 学校からは制服が支給され、ピンクの制服や青の制服などがあります。
- ・ 幼児は大人が着るような柄の服を着ていて、しかもぶかぶかです。
- ・ 赤ちゃんはおむつをしていません。
- ・ お下がりや破けた服などを着ている人がほとんどで、私たちと全然違います。

②「食」について

- ・ アフリカのネリカ米は、5年生のぼくたちも食べてみました。
「食感が硬くておいしい」「日本のとあまり変わらない」「日本のよりももちもちしていない」「日本のより粘っていない」「噛み応えがない」「ぱさぱさして食べにくい」など
- ・ ネリカ米は、日本人の坪井さんという米作りの専門家がアフリカで現在も広めているものです。この米がネリカ米で（参観の先生方に見せる）、現地では「ライス」と呼ばれています。
- ・ 開発途上国の人、栄養失調が大きな問題です。栄養素を見てみると、ほとんどが炭水化物です。偏った食事をしているので、寿命が短いです。
- ・ 問題というと、「マラリア」や「エイズ」といった病気がありますが、一番の問題は、やはり栄養失調なのです。日本の平均寿命は80歳から85歳ぐらいですが、開発途上国の平均寿命は30歳から45歳ぐらいなのです。
- ・ ビタミンやミネラルがある食べ物を食べれば、栄養失調にならないと思いました。今は炭で料理をしているので、ガスを使えるようになれば、いろいろな種類の料理をたくさん作れて、バランスの良い食べ物を食べられて、寿命が延びると思います。
- ・ バランスの良い食生活で、ウガンダで働く農家の人たちが、力を使う畑仕事に耐えられるだけの健康を守ってあげることも大切だと思いました。

③「水」について

- ・ 地球上の28%の人がきれいな水を使えません。特に後発開発途上国では、きれいな水が使えない国が多いです。遠くの川や池から水を汲んできても汚れていて、飲んだら病気になってしまいます。「これが水を汲みに行っている写真です」
- ・ 水汲みのために学校へ行けない子もたくさんいます。安全な水を使えない人の割合は日本3.6%、後発37%、開発22%です。
- ・ こういうことをなくすためには、わたしたちが送った募金が確実に貧しい人、みんな平等にわたるようにしたいと思いました。そして、そのお金で家の近くに水を貯めるタンクを作って、遠くに行かなくてもいいようにすれば学校にみんなが行けるようになると思います。
- ・ また、日本人で井戸を掘る中村哲さんというお医者さんもいます。そういう人たちをどんどん増やしていけば良いと思いました。

<紙芝居～ウガンダの子どもの水利用の巻～>（協力隊 ウガンダの山浦隊員）

- (1) 小学校5年生のバビリさんと女の子の家族です。
- (2) 一日に1回、20ℓの灯油缶を持って、約700m離れた井戸へ水を汲みに行きます。
- (3) クラスの子たちも毎日水汲みをします。
普通の子は一日2回、多い子は5往復もします。
- (4) この井戸は日本の協力隊や専門家の人たちが作ってくれました。
- (5) 小さな妹や弟も水汲みをしていて、家族を手伝います。
- (6) 20ℓのうち、約5ℓを洗濯に使います。
- (7) 少ない水できれいに洗います。
- (8) 20ℓのうち5ℓを料理に使います。汚れている水なので、沸騰させて使います。
- (9) 20ℓのうち、5ℓを皿洗いに使います。ここでも、水は無駄なく大切に使います。
- (10) 学校には、雨水タンクが2個ありますが、雨どいが壊れたり、不備も多かったり、空になることが多く、とても困ります。
- (11) そのため、子どもたちは夕方になると水を取りに井戸まで出かけます。
3年生から7年生が午後の授業があるので、月曜から金曜まで当番制にして毎日水汲みに出かけます。
子どもたちはがんばって取りに行っています。その水は主に料理（給食）に使われます。甘酒のようなキビをお湯で溶いたもので「ポリッジ」というのが学校給食です。

④「住」について

- ・ まず、この写真を見てください。屋根はトタン、壁はレンガ、小屋は土壁、日本の約百年ほど前の建物のように。家の中に電気はなく、真っ暗です。子どもの人数はとても多くて、家は小さいです。
- ・ では、一部のお金持ちが住んでいる家はどのようなものでしょう。（緑のほうをめくる）この写真を見てください。これは一部のお金持ちが住んでいる家の様子です。さっきの写真と比べると、2階建てで、とても豪華です。高い塀で囲まれていて、中が見えないようになっています。
- ・ お金持ちは税金を払って、貧しい人に寄付するという法律を作って、格差をなくせば良いと思います。

⑤「トイレ」について

- ・ ウガンダには、日本と違って、旧式トイレではなく、水洗トイレはホテルにしかないとい

うことが分かりました。

- ・ ウガンダは、家にトイレがないと逮捕されるそうです。日本では、どの家にもトイレがあるので、その必要がありません。
- ・ ウガンダは電気もガスも水道もないので、もちろん水洗トイレはありません。
- ・ ウガンダのトイレは、まだしっかりとしていないので、実際に行って直してあげたいと思いました。
- ・ 日本とはまるで正反対だ。

⑥「子どもたちのかかえる問題」について

<エイズに関連して>

- ・ エイズにかかると、病気を直すことができなくなったり病気になりやすくなったりします。
- ・ エイズで親を失うエイズ孤児の急増が大きな問題です。2010年には、2500万人（東京・千葉・埼玉を合わせた数）に達する見込みです。その80%がアフリカの子どもたちです。
- ・ エイズ孤児にとって、もっとも怖いのは、社会から見捨てられることです。親がいなくなるばかりではなく、子ども自身も母親のお腹の中や母乳で感染していることが多く、治療も受けられないまま周囲の差別や偏見にさらされています。
- ・ ウガンダ国内にも実際に「オーファングズ（孤児）」の学校がたくさんあるということです。
- ・ 孤児というのは、親のない子どものことです。

<マラリアに関連して>

- ・ 熱帯地方に生息する「ハマダラ蚊」という蚊が運ぶ感染症です。
- ・ この病気にかかると高熱や頭痛、下痢や吐き気が続いて、死にいたることもあります。
- ・ マラリアによる死亡者は年間100万人で、そのうち75%がアフリカの子どもとなっています。

<栄養失調に関連して>

- ・ 主な原因は、偏った食事をしていたり、内戦をして食料が不足したりしていることです。
- ・ 5歳までに栄養失調で死んでしまった人は1年間に1050万人もいるそうです。ちなみに日本だと北海道・青森・岩手・秋田・宮城を合わせた数です。
- ・ 私たちが10月に鉛筆を送ったことによって、いろいろな問題をかかえる子どもたちに読み書きができる人間になってもらいたいです。
- ・ 恐ろしい病気がいっぱいあり、アフリカの子どもたちはかわいそうだと思います。これからはユニセフ募金やいらぬものなどを送る活動をしていきたいです。
- ・ 日本の人が行って、字などを教えてあげたいと思いました。
- ・ 世界の食べ物生産量が足りているにもかかわらず、食べ物がなく困っている人がいることを初めて知りました。
- ・ 社会科で勉強しましたが、私たち日本人はたくさんの食料を外国から輸入して食べ残すので、一人一人が食べ残しなどをしないようにしていきたいです。

8 調べたことを発表する。



※以下は小中連携事業の指導案

総合的な学習の時間指導案

平成19年11月12日5校時(5年教室)

5学年(男子8名、女子10名)

指導者 教諭 野村 舞子

- 1 題材名 ウガンダの子ども 日本の子ども 本時(4/4)
- 2 目標 ウガンダ(途上国)の生活について学ぶことで、日本との違いや共通点に気づいたり、自分たちの日本を見直したりすることができる。
- 3 評価規準
 - ① 途上国の子どもの生活について、調べたことや気づいたことをまとめ、発表しようとしている。【自分を表現する力】
 - ② ウガンダと日本の子どもの生活について、違いや共通点に気づくことができる。【生活に生かす力】
- 4 校内研との関連

仮説①Base活動

 ・ウガンダについてクイズ方式で子どもたちに考えさせることで、途上国に対する興味・関心を持たせる。

5 展開

段階	学 習 活 動	評価・留意点(支援)
導入	1 Base活動 ・ウガンダに関する問題を考え、答える。 2 前時までの学習を想起する。	・「少年兵について」「学校へ行けないということ」などについてふれさせる。
展 開	3 めあてを確認する。 ウガンダ(途上国)の子どもの生活について知り、日本の子どもと比べてみよう。	
	4 「ウガンダの衣・食・住・水・トイレ・かかえる問題点」を中心に自分たちで調べたことを発表する。 5 グループで相談しながら、カードを「ウガンダの子」と「日本の子」の2つに分ける。	評価規準①(発表・態度) ・終わったら、それぞれ裏返しにして組み合わせる。9枚で1つの絵が完成したら正解になることを知らせる。
ま と め	6 グループの発表やカードゲームの振り返りから、感想を話し合う。 7 次時の学習の予告をする。	評価規準②(発表・ワークシート) ・時間があれば、ワークシートに感想を書かせる。 ・幸せとは何かを考え、世界の人々の幸せについて考えることを知らせる。

- ◎ 今日の勉強で、気づいたこと、思ったこと、分かったこと
- ・ 欲しいものも買ってもらえないし、食べ物は満足に食べられないし、好きなこともできないに、明るく楽しそうに過ごしているのがすばらしいと思った。
 - ・ シロアリの巣と土を混ぜるとレンガになることを知って、びっくりしました。身近なものを利用する知恵は、ぼくの近くの人に比べてすごいと思った。
 - ・ 卵が高級品なら、昔の日本みたい。
 - ・ 満足に生きられないということ。
- ◎ 疑問に思ったこと、もっと知りたいこと、考えてみたいこと
- ・ 満足な生活ができないのに、明るく楽しく過ごしているのはなぜだろう。
 - ・ なぜ水汲みは子どもしかやらないのだろう。
 - ・ どうして、同じ地球なのに、こんなに先進国と開発途上国との差がついてしまったのか知りたい。
 - ・ ウガンダがこれからどういうふうになるか知りたい。
 - ・ こんなに不便なのに、なぜ自殺とかそういうのをしないのか。
 - ・ みんな、この生活に満足しているのか。

「ウガンダの子 日本の子」を通して

参考文献：「レヌカの学び」

※上3段はウガンダの子 下3段は日本の子

学校が大好きです。計算は苦手ですが、堂々としゃべるのは得意です。	道路は舗装されていなくてぼこぼこ大きな穴がたくさんあいています。そのため、交通事故も多いです。赤土なので水たまりも赤いです。	学校までの道のりを友だち10人ぐらいで毎日往復しています。雨が降ったら、バナナの葉を雨傘に使う時があります。
将来はお医者さんになりたいです。身のまわりにエイズで亡くなった人がたくさんいるので、そういう人たちを助けたいです。	ふだんはルガンダ語を使っていますが、学校の授業はすべて英語で行われます。英語ができないと、上の学校へ進学ができません。	おもちゃは買ってもらえないから、自分たちで身のまわりのあるものを工夫して作って遊んでいます。不便でも友だちがたくさんいるから楽しいです。
道で人と会ったら、きちんとあいさつをします。	歌ったりおどったりするのが好きです。おしゃれをするのも好き。	子どもたちは、ごはんが好きです。あと、肉より魚が好きです。
勉強はふつうに好き。日本語で生活していて、学校では英語を学んでいます。	たまには車で登校するけれど、友だち二人で歩いてきます。帰りは習い事があるから、車を利用します。	妹の宿題を見てあげるのが、一番うれしいです。ありがたいと言われるからです。

<p>夜は9時ごろ寝て、6時ごろおきます。起きたら、まずお母さんに あいさつをします。</p>	<p>将来はアナウンサーになりたいです。テレビやラジオに出て自分の意見を聞いてもらいたいからです。</p>	<p>お手伝いは茶わん洗いや夕食作りをします。スープを作ったり卵を焼いたりします。洗濯物もたたみます。</p>
<p>お母さんと約束したことがあります。将来、仕事を持って働き始めたら、毎月必ず決まった金額をお母さんに渡します。</p>	<p>おこづかいは月に600円と決まっています。ほとんど使わず、ためています。</p>	<p>お茶が好き。味が自分に合っているから。</p>

<間違っただ理由>

- ・ ウガンダの子は、たくさんお手伝いしていそう。
- ・ あいさつは日本のほうがきちんとしていそう。
- ・ 将来の夢は私たちと同じだ。
- ・ 卵は貴重品なんだあ。
- ・ 計算苦手は日本人かと思った。
- ・ 毎月給料を渡すのは、親孝行なウガンダの子どもかと思った。
- ・ 兄弟関係はウガンダのほうが仲良さそう。



<課題>

小中連携での発表であり、参観の先生方にも広く途上国のことを知らせるいいきっかけになったと思う。子どもたちは自分たちが調べたことを精一杯伝えることができたと思う。感想を見ると、子どもたちの興味はそれぞれで、途上国の抱える問題に目を向けられる児童は少ないようだ。

9 「幸せとは何か」について考える。

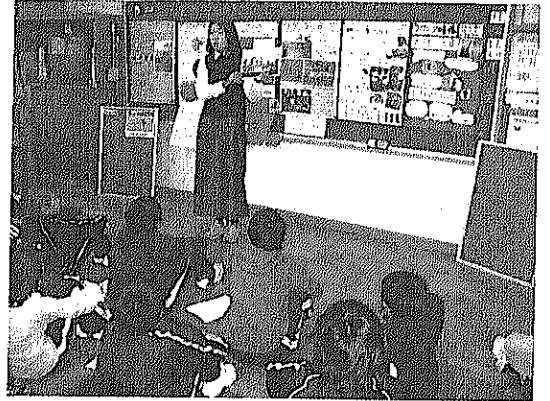
「幸せな人生に必要なものランキング」を行う。

(家族 友だち 生きがい・夢・目標 お金 水 衣食住 インターネット・ケータイ 学校 ゲーム・まんが本 でランキング)

◎ 児童の感想から

- ・ お金がなくても生きがいがあれば生きていけること。
- ・ やっぱり一番大切だなあと思ったものは「家族」でした。わけはみんなで助け合ったり、守りあったり、いろんなことを乗り越えられそうな気がしたからです。
- ・ 他の班の発表を聞いて、やっぱり家族や友だちがいないと相談したくてもできないなあと思いました。家族がいないと自分たちもいなかったから。
- ・ 命や家族を大切にしたい。

- ・ 家族はいつでも支えてくれる存在、大切だ。友だちは、どんなつらい時でも助けてくれたり、励ましてくれたりする。
- ・ 学校や衣食住も大切だけれど、やっぱり家族が必要だと思いました。生きがいなどは大事なので、ランキングを作るのは難しかったです。
- ・ 一人じゃ、何もできないことがわかった。
- ・ 家族はあったかいし、一人では心細いし、家族がいるから何でもできるし、家族から学ぶこともあるし、家族はいろんな良いことがあることを改めて思いました。
- ・ 生きがいがあるからこそ人間となれるのであって、人間は生きがいや大切な人がいるから生きていけるのだと思う。



<課題>

まとめの授業であり、ふだんとは違った視野で考えたり、友達の価値観を聞いたりすることができた。

物質の豊かさが生活の豊かさにつながるとは限らないということに気づいた児童がいた。

(4) 課題と成果

ウガンダ視察をしてきて、たくさんの情報と驚きと・・・あったが、子どもたちにどうおろしていけばいいのか、2ヶ月ぐらいいろいろと悩んだ。

9月にウガンダの山田隊員から「世界の笑顔のために」事業で、現地に楽器や文房具を頼まれ、子どもたちは全校へ呼びかける活動にも携わることができた。毎日昼休みには届いた文房具を整理整頓する子どもたちのやさしい気持ちが末永く続くことを祈った。

また、10月ごろちょうど道徳の副読本に「ウガンダの少年兵」のことが載っていたので、それをきっかけに授業を始めることができた。私もそうだったが、子どもたちはショックを受けていた。同じ地球上に自分たちと同じ時代にこのような境遇の子どもたちがいるということに気づいてほしかった。児童は平和な日本で何不自由のない生活をしている。だから、今回の学習を通して、途上国の子どもたちの置かれている実情を知ることができた。「どうして同じ地球なのに先進国と途上国との差がついてしまったのか」と感想を述べていた児童がいたが、まさにその通りだ。

今回の授業を通して、子どもたちは平和なで豊かな日本の良い点にも足りない点にも目を向けられるようになったと思う。途上国のよさに目を向けた「こんなに不便なのになぜ明るく過ごせるのだろう」という児童がいたが、物質的に恵まれていることが決して幸せとは限らないという別の視点を持つことができた。

将来的には、広い視野を持ち、国と国が仲良く、経済面での格差をなくすことに力を注ぎ、世界を舞台に活躍する人材を一人でも多く育てられたらと願っている。児童の一人が、「ウガンダがこれからどういうふうになるのか知りたい」と感想を述べていたが、私も同感である。

途上国のこれからは見守りながら、一緒に応援していきたい。

タイトル お米から世界をのぞいてみよう

氏名 竹内 守 (秋田市立港北小学校)

実践教科 総合的な学習の時間

時間数 1時間 (全10時間)

対象生徒・学年 小学5年生

対象人数 115名

1、カリキュラム案

(1) 実践の目的

5年生は、「チャレンジ米作り！2007」と題して、田植え体験から稲刈りまでの一連の活動を通して、お米博士になるべく学習を進めてきた。稲刈り後は、米米パーティを開き、外国の米（タイ米、イタリア米など）との食べ比べから、米を通して外国を理解する学習（国際理解）へと発展させていく。

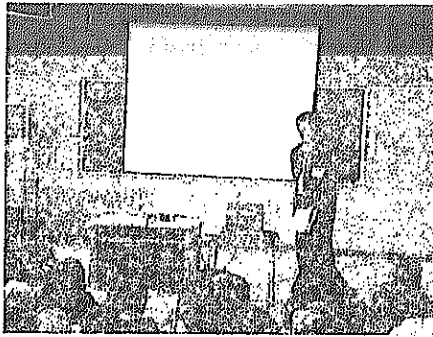
そこで、米を通してどのように世界に目を向けることができるのか、今後の学習の動機付けとして、ウガンダで取り組まれているネリカ米と普及活動を紹介することにした。ここで、大事にしたいことは、自分たちのイメージしている米と全く違う米があることへの驚きから、素直に「違い」を良さとして受け入れる他者理解の大切さである。また、外国のために頑張っている日本の若者の存在を教えることで、国際理解だけで終わらずに、国際貢献までを意識できるようになればと思う。

(2) 授業の構成案

時限・テーマ・ねらい	方法・内容	使用教材
1時限目 テーマ：お米から世界をのぞいてみよう ねらい：ウガンダで取り組まれているネリカ米や普及活動について知らせ、日本とは違う世界に興味・関心をもたせる。	(1)日本の食料事情について予想させる。 (2)世界の飢餓状況について知る。 (3)西アフリカの取り組み「ネリカ米開発」について知る。 (4)ネリカ米普及のための日本の支援について知る。 (5)フォトランゲージで、ネリカ米の特徴を考え、まとめる。 (6)ウガンダの食について知る。 JICAについて知る。	○パワーポイントスライド ・世界の飢餓状況 WFP ハンガーマップ ・ウガンダ坪井 研究員からのスライド ・大阪府社会科研究会HPの 写真

2、 授業実践の詳細

授業風景



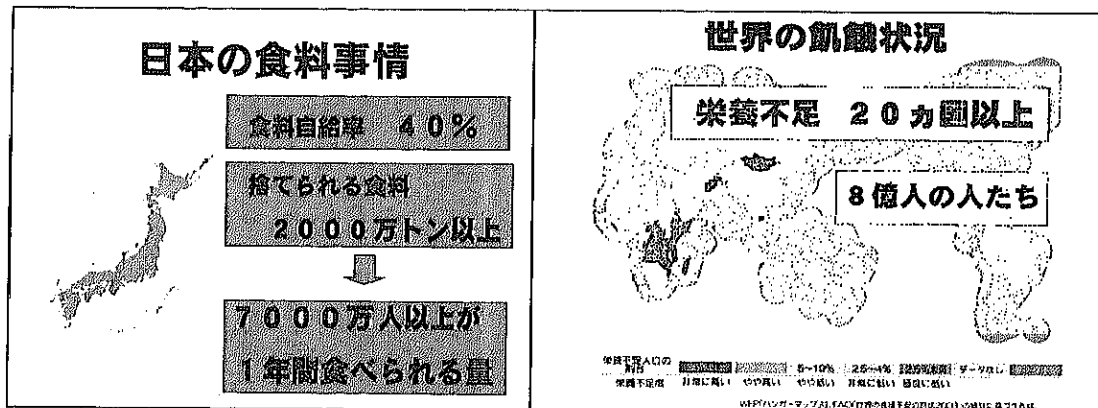
集団学習室において



真剣に聞きメモをとる5年生

指導にあたって配慮したこと：スライド2、3

「なぜ、ウガンダの話なのか」という必然性がなければ、単なる「外国へ行った人の話」で、一生懸命聞こうとはしないだろう。そこで、日本の食料事情から豊かな国日本と世界の飢餓状況とを対比することで、当たり前前に生活している毎日がいかに恵まれているのかを教えることから始めることにした。



児童の反応

- ・ 私は、日本の食料自給率が低いことが分かりました。ほとんど輸入に頼っている。
- ・ 世界では、おなかをすかせている人が8億人もいることが分かりました。
- ・ 今まで日本の食料事情について考えたことなんてなかった。

指導にあたって配慮したこと：スライド4、5（大阪府社会科研究会HPの写真）

世界の飢餓状況から、アフリカの国々が深刻な状況になっていることが分かった。そこで、食料不足に対処するために、西アフリカの人たちが米の開発に取り組み、ネリカ米を開発したことを教えることで、「米から世界をのぞいてみよう」のテーマに沿うようにした。そして、ネリカ米の写真を見せ、見た目には同じ米であることを感じとらせた。

西アフリカの取り組み

コメの開発

ネリカ米

NERICA (New Rice for Africa)



児童の反応

- ・ アフリカの国は、食料がなくて死にそうな人がいるけど、自分たちで米を作ろうと発想したのがすごかった。
- ・ 初めて「ネリカ米」という米を知りました。

指導にあたって配慮したこと：スライド6、7、8、9

輸入した食料を捨てている日本というよくないイメージをもたせたままで終わらないように、日本がネリカ米に対して行っているウガンダでの支援と頑張っている日本人を紹介することで、日本人としての誇りを少しでも伝えたいと思った。



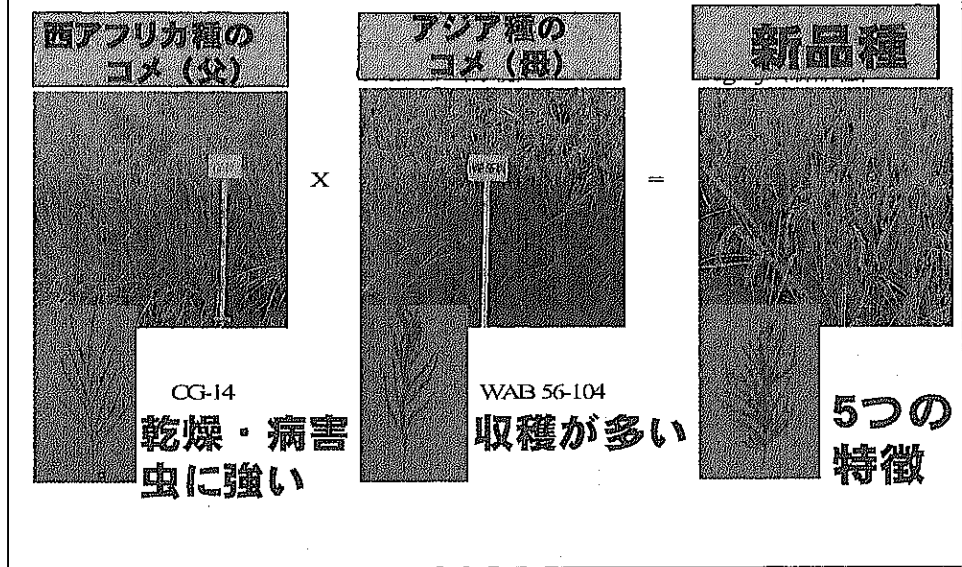
児童の反応

- ・ アフリカのネリカ米は、日本人と協力して作られた米ということが分かった。
- ・ アフリカと協力してネリカ米を作ろうとしたのは、とてもいいことだと思います。
- ・ おなかをすかしている人たちを助ける日本人がいてうれしい。

指導にあたって配慮したこと：スライド11

ネリカ米がどのようにして生まれたのか、そして、その特徴について写真から読みとれるようにした。アフリカの米とアジアの米のよさが受け継がれていることを押さえた。

アフリカイネとアジアイネの交配種



児童の反応

- ・ ネリカ米は、アフリカの米とアジアの米をまぜて作っているということが分かった。
- ・ アフリカ稲とアジア稲が合体してネリカ米ができたのがすごいです。

指導にあたって配慮したこと：スライド 12、13 (大阪府社会科研究会HPの写真)

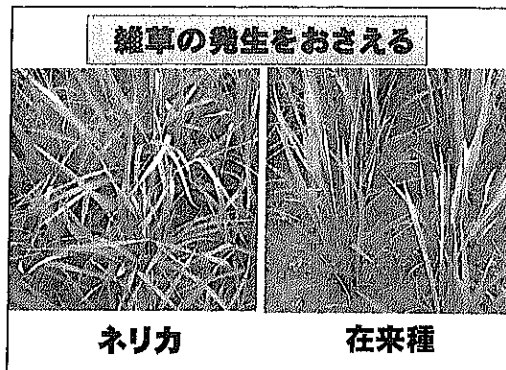
ネリカ米の特徴が写真からつかめるように、5月に行った田植えとの違いに着目させる。大きな違いが「陸稲」であることに気付かせる。(特徴①)



指導にあたって配慮したこと：スライド14、15

ネリカ米の特徴② 収穫量が多いことを写真から感じとらせる。

ネリカ米の特徴③ 雑草の発生をおさえることは、分かりにくいので教える



指導にあたって配慮したこと：スライド16、17
 ネリカ米の特徴④ 発育日数が短い。早く収穫ができることに気付かせる。
 ネリカ米の特徴⑤ 収穫が楽にできる。稲刈りで腰が痛くなったことを想起させる。



指導にあたって配慮したこと：スライド16
 雑草のように生えているネリカ米の写真を見せ、日本の水田のイメージを払拭する。



児童の反応

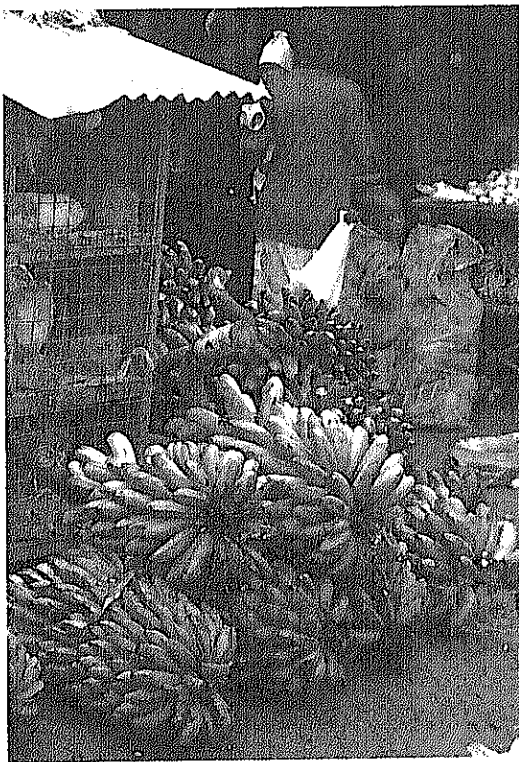
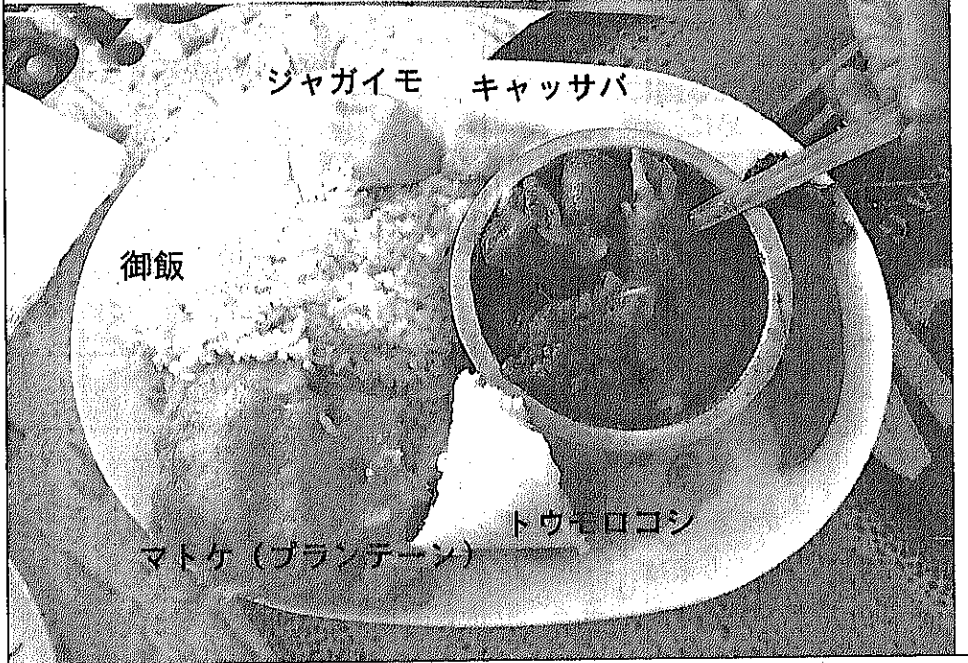
- ・ ネリカ米は、どんなところに植えても育つことが分かった。
- ・ 日本の米と違って水がいらなことがびっくりしました。
- ・ ネリカ米のような米がたくさんできればいい。

指導にあたって配慮したこと：スライド19、20

ウガンダの食生活について紹介し、国が違えば食も違うことに気付かせる。また、国際理解は相手を知る（受け入れる）ことから始まることを話す。

ウガンダの主食

その他：サツマイモ、タロイモ、カボチャ



・ マトケ (青バナナ)

マトケになるバナナは甘味はなくて、バナナの葉に包んで2時間から3時間じっくりと蒸し焼きにする。出来上がったものは、マッシュポテトのような形状で、味は甘くないサツマイモのようなかぼちゃのような味。

・ ポショ (とうもろこし)

とうもろこしの粉を熱湯で練った食べ物。

炭水化物がとても多い。

指導にあたって配慮したこと：スライド21

国際貢献は、特別な人がするのではなくだれでもができることを感じ取らせるために、JICAについてふれ、緒方貞子さんの言葉を紹介して終わる。



緒方貞子

**世界の人々から
信頼され、
期待される国に
なるために、
国際協力を日本の文化に
していきましょう。**

児童の反応

- ・ わたしは、国際協力のためにどんなことをすればいいのか考えてみようと思いました。
- ・ 緒方貞子さんは、他の国のことも考えていてすごいと思った。
- ・ 日本人の中には、外国にも協力している人がいたなんて初めて知りました。

7 学習を終えて

児童の感想をもとに振り返る。

「アフリカは、ネリカ米を使ってすごいと思いました。また日本人が協力していることが分かりました。ネリカ米は、初めて聞くけど、特徴が5つありどれもびっくり、庭先でもつくれてすごいなと思います。私たちの知らない米の名前があると思うので、その名前を知り、どうなって作られているのかを調べたいです。」

ネリカ米という米を初めて知り、自分の知らないことがあることに気付き、もっと米のことを調べたくなっている。動機付けになったことがとてもうれしい。

「私は、話を聞いて、もうすこし食べ物を捨てないように作る量を減らしたり、努力したらいいのでは…。と思いました。日本の国は、食べ物に困ることはないけれど、もう少し他の国の人々のことも考えられる人になりたいと思いました。」

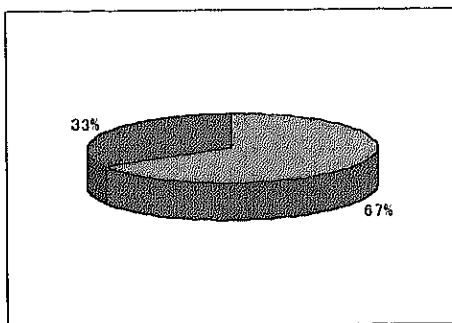
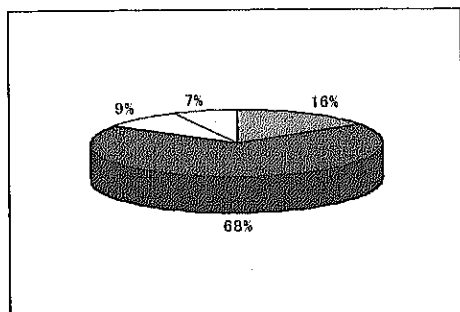
もう少し他の国の人々のことも考えられる人になりたい…この言葉が聞きたかった。ネリカ米の話だけに終わらずに、それに取り組む日本人の人々にも焦点を当てたことが良かったと思う。

児童の記録用紙から

記録用紙には、「今日 get したこと・ポイント」を一言で書くところと「重要度」（とても重要、まあまあ重要、今は判断ができない）をチェックするところがある。2クラス分の回収から見ている。

「今日 get したこと・ポイント」

「重要度」



68%…ネリカ米のこと、特徴
 16%…日本の支援、
 頑張っている日本人
 9%…食料事情
 7%…ウガンダの取り組み

67%…とても重要
 33%…まあまあ重要

「今日 get したこと・ポイント」からは、ネリカ米を中心にしながらも、支援する日本へ関心をもったことがうかがえる。「日本とアフリカは、お米でつながっている」と書いた子どもがいた。このことこそ、私が伝えたいことだったのだと改めて教えられた気がした。食料事情について印象に残っている子どもたちには、今後の学習が、自分たちの生活を見つめ直すことにもつながっていくと期待している。

「重要度」については、7割の子どもがとても重要な話だったと答えているので、伝える意味があったと感じている。何のために「お米から世界をのぞいてみよう」なのか、子どもたち一人一人がその意味を探しながら、学習が展開されていくことを願う。

8 最後に

子どもたちの感想の中に、「ネリカ米を食べてみたい」というのが多かった。正直な感想だと思う。「本当にネリカ米は、よい米なのか？先生はそう言うけれど、自分で試してみないことには信用できない。」そういう子どもを育てたい。

次年度は、実際にネリカ米を育て、日本の米と比較する学習活動を展開し、ネリカ米を多くの人に知ってもらい取り組みをしたい。そして、お米を通して世界に興味・関心をもち、国際協力を考える人が少しでも増えてくれればと思う。

世界の困っている国で、頑張っている多くの日本人がいることを知ることは、子どもたちにとっては、大きな励みである。青年海外協力隊員の取り組みをこれからも機会を見つけて紹介していかななくてはならない。